
モンスターハンター『砂漠の守護者達』

九鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター『砂漠の守護者達』

【Nコード】

N6261D

【作者名】

九鬼

【あらすじ】

『モンスターハンター』の二次創作となります。灼熱の砂漠地帯にある国境線。それを警備する任にある部隊。その敵はなにも国境線を不法に乗り越えようとする密入国者だけではない……。

（前書き）

久々の執筆活動となります。

今のところはまだ忙しい日々が続いているので、短編ならば、
思い投稿させてもらいました。

感想などあればよろしく願います。

砂漠の国境線の警備、という仕事は楽ではない……。

むしろ、かなりの重労働であると、この砂漠の国境線の警備隊に配属されて一月、私はそう思った。

私はたしかに、こういった砂漠地帯で生まれ育ったのだが、しかしそれは、たったの一年ほどのことなのである。

私が生まれて一年で、両親は何も知らない赤子の私を連れて中央の都市へと移り住んだ。

両親からはそう聞いている。

しかし、私は軍に入隊する際、自らの経歴にしっかりと、砂漠地帯の生まれであると書いてしまった。

その結果がこれだ……。

今はひたすらに後悔している。

「あ……暑い」

何回目か……いや、何十、何百回かも分からないその言葉を、私は心の奥底から吐き出した。

「いい加減に慣れる、エルクウ。ここに来て一月、それにおまえは砂漠地帯の出身だと聞いているが……」

私よりもずっと前からこの国境線の警備の任に就いている先輩で、今やこの部隊全体の副隊長でもあるアーチボルドが、国境線の方にその鷹の眼を光らせながら私に言った。

もちろん『エルクウ』というのは私自身の名前である。

近年、密入国者が急激に増えてきており、特にその密入国に都合の良いこの砂漠地帯は、過密な警備体制が敷かれている。

私もそれに伴う隊員の増員に巻き込まれてこの場所に來たのだが……。

そんな理由もあって、私達は三人一組で国境線付近を散策、もとい警備している。

私とアーチボルド副隊長、そして後の一人は同じ部隊でありながら、名前も知らない、うす汚れた痩せ型の男。

「うー、せめて駐屯地でゆつくりとしていたかったです……。何が悲しくてこんな暑い中、こんなにもむさ苦しい髭親父と一緒に歩き回らないといけないのか、理不尽です」

私はアーチボルド副隊長に暴言を吐いて気分を紛らわしつつ、砂丘をいくつか越えたところにあるであろう、部隊の駐屯地を思い描いた。

「おい！！ この髭は俺の魂だと、何度言えば分かる。誰にも文句は言わせんぞ！！」

ずーっと砂漠の向こう、熱で揺れる飾り気のない茶色の風景を見ていたアーチボルド副隊長も、さすがにこちらを振り返った。

それと同時に、アーチボルド副隊長が魂と豪語する、あの口まわりの剛毛が私の目に飛び込んでくる。

実に不快だ……。

一生そのまま向こうの方を見ているか、その腰に引つ提げた剣で今すぐ剃るかして欲しい。

「このババコンガめ……」

と、私は沼や密林地帯に生息する、あの毛深い極彩色のモンスター

ーの名前を挙げて皮肉を返す。

確実に良い意味ではないと言える。

気がつけば名無しさん（今私が勝手につけた名前だが）が、うっすらと笑い声を漏らしていた。

この部隊に来て、私が唯一良かったと思えることは、この軍隊とは思えない自由過ぎる空気である。

さすがにこの辺境の地までは軍の厳しい規律も存在感が薄いのか、もしくは笑い無しではやっていけなさそうな、この劣悪な環境のせいかは分からないが、とにかく今みたいなやり取りは普通に日常のーコマだ。

「くっ……！！ この小娘が、言ってくれよるわ！！」

さすがに今のは少々心に響いたのか、アーチボルド副隊長も顔をしかめて悔しがる。

私はそれを見て笑うのが好きなのだ。

そして、今回もまた例外なく笑わせてもらっている。

名無しさんなんかは、さっきからずっと笑いっぱなしだ。

「くっ……、ガキどもが。駐屯地に戻ったら覚悟しておけよ!!」

と、アーチボルド副隊長はわざとらしい負け犬のセリフを吐くが、やはりその表情には笑みがあつた。

が、しかし

「ま……待て!! 静かにしろ!!」

アーチボルド副隊長は次の瞬間には、声を荒らげ、目を見開き、私達に制止を促していた。

アーチボルド副隊長の変貌ぶりと迫力ある顔に、私と名無しさんは有無を言わず黙らされる。

一瞬で辺りは本来の静寂に戻り、僅かにそよぐ、熱を持った風の音だけがした。

沈黙が続く……。

しかし、変化はあった。

足元、どこまでも続く砂地が振動している……。

縦に、横に、次第に立っているのがやっというほど巨大な揺れへと変わっていく。

「えっ！？ ちょっと何ですかこれ、地震！？」

私は突然の出来事に、たまらず悲鳴にも似た声を漏らす。

「いや、待て！！ この揺れは……気をつける！！」

アーチボルド副隊長が揺れる砂の上で何とかバランスをとろうと奮闘しつつ、叫んだ。

私なんかはとつくの昔に転倒してしまい、柔らかい砂の上に伏してしまっているのだが……。

そして、次の瞬間だった。

揺れが最大に達すると同時にピタリと止んだ。

それと同時に響いた轟音……、現れたのは巨大な影。

何故か、遙か上空へと舞い上がってしまったている名無しさん……。

そして、驚愕に目を見開く私とアーチボルド副隊長。

「ぬう！？ こいつは――！」

名無しさんが砂地に叩きつけられると同時にアーチボルド副隊長が我に戻り、声を漏らした。

「ダイミヨウ……ザザミ、ですか？」

私は目の前の光景をそのまま述べるか、名無しさんを心配する声を上げるか、その二択で一瞬悩んだが、とりあえず前者の方を選んだ。

「ダイミヨウザザミなのか……？ しかし、この姿は――！」

アーチボルド副隊長は信じられない、といった様子でそいつの姿を見た。

まあ、無理はない。

私だって驚いている。

青紫のダイミョウザミ、背中に背負われた双角竜の頭蓋、その平均を大きく上回るサイズ……。

圧倒的な存在感だった。

特に、先入観というやつに囚われていた私達には……。

「突然変異種ってことですかね……？」

実に率直な意見だと思った。

でも、正しいと思う。

しかし、感想を述べる時間はもう終わりのようだ。

そいつが、その鉄を振りかざし、残る私達に襲い掛かってきたのだから……。

別に、モンスターと交戦すること自体は初めてではなかった。

ここに配属される前に数回、ここに来てからの一月ですでに五回。その五回の中には通常のダイミョウザミと戦った経験も二回含まれている。

それゆえ鉄を攻撃に用いる、という通常種の生態と変わらない動きにはなんとか対応することができる。

私はもとより体勢を崩していたが、砂地を懸命に転がって、その体色と同じ青紫の鉄の猛威をかい潜ることに成功した。

「仕方あるまい！！ エルクウ、戦うぞ！！ いいな！？」

同じく攻撃をかわしたアーチボルド副隊長が、私に命じる。

ようやく、アーチボルド副隊長が上官として感じられるセリフを聞いた気がした。

「了解です、副隊長！！」

ここから先は私の真面目モード全開でいかしてもらおう。

が、その前に

「副隊長！！ 名無しさんは！？」

「名無し！？ 奴のことか！？」

名無しさんは現在、ダイミョウザザミからはそれなりに離れた位置に倒れている。

時々苦しそうな動きを見せているため、気を失っているわけでもないし、ちゃんと生きているようだ。

しかし、このままでは危ない。

「エルクウ！！ このままこいつを離れた場所までおびき出すぞ！！」

アーチボルド副隊長がすぐさま決断を下し、私に命じた。

「了解です！！ きゃあっ……！！？」

私が確認を返すと同時に、ダイミョウザザミらしきこの生物は身を翻す様に、数本の脚を器用に動かし体を回転させた。

近くにいた私は、それにより飛び散った大量の砂を頭から被ることになったのだ。

「この、乙女の敵め……。覚悟しなさいよ――！」

とは言っただものの、まずはこいつを名無しさんから引き離さないといけない。

髪の毛の中の砂のことなんて後から考えればいい。

「ついて来なさい――！ こっちでたっぷりと仕返ししてあげるから――！」

私は走った。

砂地なために走りにくい、必死に、できるだけ速く走った。

そのまま見かけによらず私よりも足の速いアーチボルド副隊長を追うようにして走り、色違いのダイミョウザミを引き付ける。

途中、何度か鋏が振るわれたが、どうやらこいつは一定の速度を保ちながら鋏を振ることはできないらしく、その意外な俊敏さで私達に追いついても、攻撃の際の減速のせいで、今のところは私達を捉えることはできていない。

それでも、こいつのサイズが平均を大きく上回っていたということ、その意味をなした。

私のスタミナの無さという弱点もあって、次第にやつの攻撃間隔がなくなり、遂にはやつが私の背中を掠めたのだ。

（まずい……、こいつは強敵だ……）

肩で息をし、冷や汗も混じった大量の滝汗を流しながら私はそう思った。

それに加え、暑さで体中の血液が沸騰寸前といった状態である。

しかし、さすがにヤバイと思ったところでアーチボルド副隊長が反撃の狼煙を上げた。

私とダイミヨウザミの間に割って入るようにして突っ込んできて、その剣を振るったのだ。

アーチボルド副隊長の持つ剣は、片手用の剣にしては大きく、両手で握るには少々小さ過ぎるといった、どっちつかずの物ではあるが、彼はそれを片手で振るい、なおかつその威力を引き出す。

「ぬっうんっ！！」

気迫のこもった一声とともに振るわれた剣は、ダイミヨウザザミが右の缺を振るう際に軸脚にしていた左前方の脚を、甲殻の上からでも見事に斬り裂き、ダイミヨウザザミの支点を崩した。

その瞬間に振るわれようとしていたダイミヨウザザミの右腕、右の缺は力を込めて踏ん張りをきかせていた左前脚に強烈な攻撃を受けたことで、バランスを失ったため、その本来の狙いとは全く異なった場所に激突、その半分を砂に埋もれさせる。

「エルクウ、好きなだけやり返していいぞ！！ 派手に暴れろ！！」

副隊長が叫んだ。

しかし残念なことに、副隊長の熱いセリフを私は聞いていなかった。

すでに私は腰の両側に一本ずつ引っ提げた二本の剣を抜き、攻め込んでいたのだから……。

狙うは副隊長が狙った脚と逆の、右前方の脚……。

右を二回、左を一回。

合計三回の剣撃を、その青紫の堅い甲殻の隙間を縫うようにして浴びせた。

一つ一つの攻撃では深い傷は与えられないが、三度の斬撃は、それぞれ与えた傷を掘り返すようにその小さな傷を刻み、それは一つの大きな傷へと変わる。

しかし、ダイミョウザミは両前脚を斬られ、前方へとその巨大な身体を倒しそうになりながらも傷ついたその脚で踏ん張り、かつ砂に埋もれた右の鍔を引き抜くと、それを振りかざして自らの健在を象徴する。

「くうーっ！！ 頑張り過ぎでしょ、こいつー！！」

個人的に綺麗に決まったと思った三連撃を耐え抜かれ、私は悔しさを噛み締めた。

「ふん！！ そうでなくては面白くない！！」

一方のアーチボルド副隊長は間合いをとりつつ、そんなことを口にする。

「ちょっと、楽しまないでくださいよ！！ 命懸けなんですから真剣にお願いします」

言いつつ、私もダイミヨウザザミの側面に出るように、砂まみれになりながらもその脚の下をくぐり抜け、仕掛けてくるであろう次のダイミヨウザザミの動きに備えた。

するとダイミヨウザザミは私に見向きもせず、鍔を振り上げ、その前方にいる副隊長の方に向かって行く。

「己を鍛えるには良き相手だ！！ さあ、来い！！」

それでも副隊長は戦い慣れしているのか、微動だにせず、むしろ、どつしりと構えたその姿からは余裕すら感じさせている。

任務を己の鍛練に使うなよ、と私は内心呆れつつ、同時にそんな副隊長を頼もしくも思えた。

ダイミヨウザザミは小細工なしで正面から両の鍔を身体の横にそれぞれ構え、まっすぐ副隊長へと、どんどん加速しながら突き進んでいく。

それを睨み据えながら、剣を今度は両手で握り、待ち構える副隊長。

その距離が限りなく近くなり、しかしギリギリ両者の間合いの外というところで、ダイミヨウザザミの鍔が動いた。

「勝負を焦りおったか、愚か者め！！ この戦い、俺が貰った！！」

間合いを読み切った副隊長は、確信的な勝利をその手にすべく、
鍔が振り切られた直後を狙う。

そして、その予想は外れることなく、
ダイミヨウザザミの鍔は、副隊長の目と鼻の先を掠めるように空を
切る。

その隙を逃さず、副隊長はから空きになったダイミヨウザザミの
懐へと飛び込み、気合いの雄叫びを轟かせながら、両手で握り締め
た剣の刃を、ダイミヨウザザミの腹へと突き出す。

力任せに突き出された刃は、ダイミヨウザザミを守る最後の壁で
ある甲殻に遮られ、その勢いを一瞬失ったかと思われたが、何かが
砕け散る鈍い音とともにそれを叩き割り、ダイミヨウザザミの急所
へと青黒い血を噴き出させながら突き刺さった……。

「やった……！！」

それを横で見せつけられた私はたまらずその瞬間にそう叫んだ。

「ぬう……、砂に足を取られたか……!？」

しかし、副隊長は私とは反する、悔しそうな声を漏らしていた。

何故かはすぐ分かった。

その腹に剣を刺し、大量の鮮血を砂地にぶちまけ、染めながらもダイミヨウザザミは未だに立っていたのだ。

後一押し……足りなかった、というべきだろうか。

そして、ダイミヨウザザミは口から血の混じったような青黒い泡を噴き出しながら再び右の鉄を振るう。

「ぐおおっ……!!」

近くに突っ立ったままであった副隊長は、それによつて軽々と吹っ飛ばされてしまい、両手で握っていた剣も滑るように抜けてしまった。

「副隊長!？」

私は咄嗟に叫んだ。

「大丈夫だ！！ それよりも早く奴にとどめを刺せ！！」

副隊長のその一声で、私は両手にそれぞれ握った剣をさらに強い力で握り締め、すでに先ほどまでの力を感じさせないダイミョウザザミに向かって一直線に突っ込んだ。

「いいかげんに倒れなさいよ！！」

二本の剣を振るのではなく、突く。

瀕死の相手にとどめを刺すべく、ただがむしやらに、攻撃の通る箇所を突きまくった。

しかし、それを遮るかのように巻き上げられる大量の砂……。

「くっ！！ こいつ、潜って逃げるつもりなの！？」

そうはさせるかと、立ち込める砂煙に視界を塞がれつつも、強引に、さらに激しく攻撃を重ねる。

だが、私の武器の威力では例え相手が瀕死であろうと、それを止めることはできなかった。

ダイミヨウザザミは、爆発があったのかと思われるほどに砂を巻き上げ、近くにいた私をその下に埋めて、そのまま姿を砂の底へと消してしまったのだ。

「ああーっ、もう！！ 悔しい！！ 悔し過ぎる！！」

私はダイミヨウザザミの青黒い血液を大量に含んだ砂の底からはいずり出した……。

全身のあらゆるところから、砂のじりじりとした嫌な感触が伝わってくる。

さらに、ベトリとした血の感触と匂いは私の不快感をさらに増長した。

そしてなによりも、奴を仕留めきれなかったのが悔しい。

「はぁ……。しかも暑いし、最悪の極みってやつよね……」

砂を飲んだらしく、かなり口の中がじりじりする。

せめて、早く駐屯地に帰らせて欲しい。

「エルクウ、無事か？」

アーチボルド副隊長が私のもとへと駆け寄って来る。

悪いが副隊長愛用の剣はどこかへと行ってしまった。

私は深々とため息を吐いた……。

そして、ゆっくりと立ち上がろうとした……、その時だった。

私はバランスを崩し、再び砂を舐めることになった。

言っておくが、脚をやられたわけでもなければ、バランス感覚も正常そのものだ。

砂地にもさすがに慣れた。

ならば何故……？

それは至って簡単である。

大地が揺れているのだ……。

「えっ！？ うそ！？」

そんな馬鹿な……。

私は混乱するしかなかった。

奴は逃げてなどいなかったのだ。

突如として地面から突き出た双角が、それを証明していた……。

「エルクウ！？」

副隊長の叫びが轟いた。

しかし、聞こえない。

たった今、脇腹をえぐられて宙を舞っている私には……。

柔らかな砂の感触は、焼けるようなとてつもない痛みによってかき消された。

白く染まりかけていた意識もそれよって繋ぎ止められる。

私の耳は副隊長の繰り返される叫びをようやく聞き、目は迫り来る瀕死の奴の姿を見ている。

私の左手はえぐられた傷を抑え、流れ出る血を遮り、右手は未だに剣を握っていた。

そして、私の脚は……、私のふらつく体を砂の上でしっかりと支えている。

どうやら、まだ自らの油断を挽回するチャンスはあるということらしい。

「やばい……。痛すぎて頭がおかしくなりそう……」

私は血と一緒に言葉を漏らし、右手で持ったその剣をゆっくりとこっちに迫ってくるそいつに向けた。

そして、青紫のダイミョウザザミの巨体が私の目の前にまで迫ってくる。

私にはただ剣を突き出すことしかできない……。

しかし、それも、ダイミヨウザザミが邪魔だとばかりに振るった
鍔に弾き飛ばされ、どこか向こうの方へと消えてしまう。

そして、私の持てる唯一の驚異を排除したダイミヨウザザミは、
今度は逆に私にとどめを刺すべく、両の鍔を振り上げた……。

「うあああああああつ！！」

しかし、私はそれが振り下ろされる前に、自分でも意味不明な叫
び声を上げて、“それ”に向かって、脚から崩れて転げそうになり
ながらも突っ込んだ。

そして、“それ”を目掛けて、肩からぶつかった。

そう、“それ”に……。

ダイミヨウザザミの腹に突き刺さった、アーチボルド副隊長愛用
の剣に……。

振り上げられたダイミヨウザザミの鍔がピタリと止まった。

その腹には根本までしつかりと突き刺さった剣……。

どうやら私の非力な力でも、軽い体重であっても、それをなすことは出来たらしい。

ダイミヨウザザミの鉄が、今ゆっくりと、力なく落ちた。

「終わった……」

私はそれだけ言うと、意識を手放した……。

「カッコつけて、いちいち気を失うな」

が、副隊長の声がして、さらに副隊長は私の脇腹をひっぱたいた。

「きゃああああーっ!!」

私は激痛に一瞬白目をむくほどに、もの凄い悲鳴を上げて、意識を取り戻す。

「副隊長!?! こ、殺す気ですか? いえ、絶対に今私を殺そうと

しましたよね!？」

私は副隊長に怒りの罵声を浴びせる。

「馬鹿者が……。よく見る!! かすり傷だ!!」

「えっ……?」

副隊長に言われ、私は未だに激しい痛みを訴える脇腹の傷を見た。

なるほど、鎧は碎けて、血はもの凄く流れているし、傷の幅も勲章ものである。

が、しかし。

確にかすり傷である。

命に全く別状はない。

「あ……あれーっ? かすり傷ですね、副隊長」

「かすり傷だな。心配させよって……」

副隊長はため息を吐いて、ゆっくりと立ち上がった。

「しかし、よくやった。褒めてやろう。駐屯地に帰ったら酒でも奢ってやることにしよう」

「あつ、名無さんも回収しないと……。それから、私はお酒は飲めないんでジューズでお願いします」

私は向こうの方から、今になってよたよたとおぼつかない足どりでこちらに向かって来る名無さんの姿を認めると、ようやく帰れるかと安堵しつつ言った。

「よし、ではこれより、駐屯地へと帰還する!!」

アーチボルド副隊長が力強く叫ぶ。

「了解です、副隊長!!」

私はそれを聞き、先頭を切って歩き出した……。

それから砂丘をいくつか越え、私達は駐屯地へと帰って来たわけだが……。

「まさか、駐屯地が一角竜に襲われているとはな……！！」

アーチボルド副隊長が燃え上がる駐屯地を見て驚きをあらわにする。

「ホントに最悪ですねこの部隊……」

私は力のない、ため息にも似た声を漏らす。

「仕方あるまい！！これより駐屯地の防衛に加勢するぞ！！」

叫び、アーチボルド副隊長が駆け出す。

「はぁ……、了解です」

そして、私もそれに続く。

確かにこの砂漠の国境線の防衛部隊は最悪だ。

しかし、決して飽きることだけはなさそうである……。

《終わり》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6261d/>

モンスターハンター『砂漠の守護者達』

2010年10月28日03時10分発行